

# Le Cam の第一補題

## Asymptotic Statistics 勉強会 第 14 回 資料

Minato

2023 年 7 月 29 日

### 概要

Asymptotic Statistics [VdV00] p.88, 89 に沿って Le Cam の第一補題の証明を記載しました。文献 [BL21] ではより丁寧な記法が用いられているので、記法は文献 [BL21] を参照しました。

## 目次

1	おさらい	2
1.1	確率変数列の収束	2
1.2	確率変数の絶対連続性と確率変数列の contiguity	2
2	Le Cam の第一補題	3
2.1	(i) $\Rightarrow$ (iv) の証明	3
2.2	(i) $\Leftarrow$ (iv) の証明	4
2.3	(i) $\Rightarrow$ (ii) の証明	4
2.4	(iii) $\Rightarrow$ (i) の証明	6
2.5	(ii) $\Rightarrow$ (iii) の証明	7
3	補足	11
3.1	収束する確率変数列の性質	11
3.2	上極限・下極限の性質	12
3.3	ラドン・ニコディムの定理	12

# 1 おさらい

## 1.1 確率変数列の収束

まず、確率変数列の収束列に関する記法を確認しておく。<sup>\*1</sup>。

### 1.1.1 分布収束

確率変数  $X_n: \Omega_n \rightarrow \mathbb{R}^k$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) を、確率空間  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n, P_n)$  上の確率変数とする。また、確率変数  $X: \Omega \rightarrow \mathbb{R}^k$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) を、確率空間  $(\Omega, \mathcal{A}, P)$  上の確率変数とする。

$X_n$  の分布関数  $x \mapsto P_n(X_n \leq x)$  と  $X$  の分布関数  $x \mapsto P(X \leq x)$  に関して、

$$P_n(X_n \leq x) \rightarrow P(X \leq x)$$

が、分布関数  $P(X \leq x)$  の任意の連続点  $x$  で成り立つとき、確率変数列  $X_n$  が  $X$  に**分布収束**する (*converge in distribution*) といい、

$$X_n \xrightarrow{P_n} X$$

と表記する。

### 1.1.2 確率収束

$a \in \mathbb{R}^k$  を定数とする。任意の  $\varepsilon > 0$  に対して、

$$P_n(\|X_n - a\| < \varepsilon) \rightarrow 0$$

が成り立つとき、 $X_n$  は定数  $a$  に**確率収束**する (*converge in probability*) といい、

$$X_n \xrightarrow{P_n} a$$

と表記する。<sup>\*2</sup>

## 1.2 確率変数の絶対連続性と確率変数列の contiguity

**Definition 1.1** (絶対連続性 [VdV00, (p.85)]). 以下のような確率測度を考える：

- $(\Omega, \mathcal{A})$ ：可測空間
- $P, Q$ ：可測空間  $(\Omega, \mathcal{A})$  上の確率測度

任意の可測集合  $A$  に対し、

$$P(A) = 0 \text{ ならば } Q(A) = 0$$

が成り立つとき、 $Q$  は  $P$  に対して**絶対連続** (*absolutely continuous*) であるといい、 $Q \ll P$  と表す。

$P, Q$  を可測空間  $(\Omega, \mathcal{A})$  の確率測度としたとき、任意の可測関数  $f$  について

$$\int f \, dQ \geq \int f \frac{dQ}{dP} \, dP \tag{1}$$

が成り立つ。また、 $Q$  が  $P$  に関して絶対連続ならば式 (1) は等号が成立する、すなわち、

$$\int f \, dQ = \int f \frac{dQ}{dP} \, dP. \tag{2}$$

<sup>\*1</sup> [BL21, (p.3)] を参照しました。

<sup>\*2</sup> ここでは、収束先が定数である場合の確率収束の定義と記法を与えている。

**Definition 1.2** (Contiguity [VdV00, 6.3 Definition (p.87)]). 以下のような確率測度の列を考える：

- $(\Omega_n, \mathcal{A}_n)$ ：可測空間の列
- $P_n, Q_n$ ：可測空間  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n)$  上の確率測度の列

任意の可測集合列  $A_n$  に関して

$$P_n(A_n) \rightarrow 0 \text{ ならば } Q_n(A_n) \rightarrow 0$$

が成り立つとき、 $Q_n$  は  $P_n$  に対して **contiguous** であるといい、 $Q_n \triangleleft P_n$  と表す。

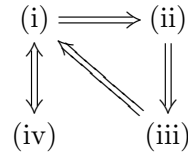
## 2 Le Cam の第一補題

**Lemma 2.1** (Le Cam の第一補題 [VdV00, 6.4 Lemma (p.88)]).  $P_n, Q_n$  を可測空間  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n)$  上の確率測度列とする。次の 4 つの主張は同値である：

- (i)  $Q_n \triangleleft P_n$ .
- (ii) ある収束部分列が存在して  $\frac{dP_n}{dQ_n} \xrightarrow{Q_n} U$  であるならば、 $Q(U > 0) = 1$ .
- (iii) ある収束部分列が存在して  $\frac{dQ_n}{dP_n} \xrightarrow{P_n} V$  であるならば、 $\mathbb{E}_P[V] = 1$ .
- (iv) 任意の確率変数  $T_n: \Omega_n \rightarrow \mathbb{R}^k$  に対して、「 $T_n \xrightarrow{P_n} 0$  ならば  $T_n \xrightarrow{Q_n} 0$ 」が成り立つ。

ここで、 $U, V$  は、それぞれある確率空間  $(\Omega, \mathcal{A}, Q), (\Omega', \mathcal{A}', P)$  上の確率変数。

4 つの主張の同値性は下記のように示す：



### 2.1 (i) $\Rightarrow$ (iv) の証明

$T_n \xrightarrow{P_n} 0$  であるような確率変数  $T_n: \Omega_n \rightarrow \mathbb{R}^k$  を任意にとる。 $\varepsilon > 0$  を任意にとると、確率収束の定義から、

$$P_n(\|T_n\| > \varepsilon) \rightarrow 0.$$

(i) より  $Q_n \triangleleft P_n$  であるから、

$$Q_n(\|T_n\| > \varepsilon) \rightarrow 0. \tag{3}$$

$\varepsilon$  は任意だったから、式 (3) は  $T_n \xrightarrow{Q_n} 0$  が成り立つことを意味する。 $T_n$  も任意の確率変数であったから、(iv) が成り立つ。

## 2.2 (i) $\Leftarrow$ (iv) の証明

可測集合列  $A_n$  を、 $P_n(A_n) \rightarrow 0$  が成り立つ任意の列とする。  $T_n = \mathbb{1}_{A_n}$  とし、 $\varepsilon > 0$  を任意にとると、

$$\begin{aligned} P_n(|T_n| > \varepsilon) &= P_n(\mathbb{1}_{A_n} > \varepsilon) \\ &= \begin{cases} P_n(\emptyset) & (\varepsilon > 1 \text{ のとき}) \\ P_n(A_n) & (0 < \varepsilon \leq 1 \text{ のとき}) \end{cases} \\ &\rightarrow 0. \end{aligned}$$

これより  $\mathbb{1}_{A_n} \xrightarrow{P_n} 0$  が成り立つから、仮定 (iv) より  $\mathbb{1}_{A_n} \xrightarrow{Q_n} 0$ . これより、

$$Q_n(|\mathbb{1}_{A_n}| > \varepsilon) \rightarrow 0. \quad (4)$$

式 (4) は任意の  $\varepsilon$  に関して成り立つから、 $0 < \varepsilon \leq 1$  なる  $\varepsilon$  を考えることで  $Q_n(A_n) \rightarrow 0$  が成り立つことがわかる。よって、 $Q_n \triangleleft P_n$  が成り立つ。

## 2.3 (i) $\Rightarrow$ (ii) の証明

表記を簡潔にするために、 $\frac{dP_n}{dQ_n} \xrightarrow{Q_n} U$  なる収束部分列を単に  $\{n\}$  と表記する<sup>\*3</sup>。与えられた  $n$  に対し、関数  $g_n(\varepsilon)$  を次式で定義する：

$$g_n(\varepsilon) = Q_n\left(\frac{dP_n}{dQ_n} < \varepsilon\right) - Q(U < \varepsilon). \quad (\varepsilon > 0)$$

ここで、 $\varepsilon > 0$  を任意にとり固定する。  $B = (-\infty, \varepsilon)$  とおくと、 $B$  は開集合であるから、Portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (v)) より、

$$\begin{aligned} \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n\left(\frac{dP_n}{dQ_n} \in B\right) &\geq Q(U \in B). \\ \therefore \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n\left(\frac{dP_n}{dQ_n} < \varepsilon\right) &\geq Q(U < \varepsilon). \\ \therefore \liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon) &\geq 0. \end{aligned}$$

$\varepsilon > 0$  は任意であったから、全ての  $\varepsilon > 0$  で  $\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon) \geq 0$  が成り立つ。ここで、Lemma 3.5 より、ある正の非増加列  $\{\varepsilon_n\}$  が存在して、 $\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon_n) \geq 0$  が成り立つ。よって、

$$Q(U = 0) = \lim_{n \rightarrow \infty} Q(U < \varepsilon_n) \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n\left(\frac{dP_n}{dQ_n} < \varepsilon_n\right). \quad (5)$$

式 (5) の証明

$\frac{dP_n}{dQ_n}$  は非負値の確率変数だから、Lemma 3.4 より収束先の  $U$  も非負値の確率変数である。  $B_n = [0, \varepsilon_n)$  とおくと、列  $\{\varepsilon_n\}$  の取り方より  $B_n \supset B_{n+1}$  ( $n = 1, 2, \dots$ ) であり、 $\bigcap_{n=1}^{\infty} B_n = \{0\}$  である<sup>\*4</sup>。確率測度の連続性から、

$$\begin{aligned} \lim_{n \rightarrow \infty} Q(U < \varepsilon_n) &= Q\left(\bigcap_{n=1}^{\infty} B_n\right) \\ &= Q(U = 0). \end{aligned}$$

<sup>\*3</sup> 本来は、元の列  $\{n\}_{n=1}^{\infty}$  と区別するために部分列を  $\{n_j\}_{j=1}^{\infty}$  などとして区別すべきであるが、本書 [VdV00] では  $\{n\}$  と書いたら元の部分列を暗に意味するものとして説明されている。

<sup>\*4</sup>  $\{0\} \subset \bigcap_{n=1}^{\infty} B_n$  は明らかなので、逆の包含関係を確認しておく。  $b \in \bigcap_{n=1}^{\infty} B_n$  とすると、全ての  $n$  に対して  $0 \leq b < \varepsilon_n$  であるから、 $n \rightarrow \infty$  を考えれば  $b = 0$  となることがわかるので、 $b \in \{0\}$ 。

$\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon_n) \geq 0$  より、

$$\begin{aligned} \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n \left( \frac{dP_n}{dQ_n} < \varepsilon_n \right) &\geq \liminf_{n \rightarrow \infty} Q(U < \varepsilon_n) \\ &= Q(U = 0). \end{aligned}$$

一方、新たな関数  $\mu_n: \mathcal{A}_n \rightarrow [0, 1]$  を  $\mu_n = \frac{P_n + Q_n}{2}$  により定めると、 $\mu_n$  は  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n)$  上の確率測度になる。

$\mu_n$  が確率測度であることの証明

まず、任意の  $A \in \mathcal{A}_n$  に対して  $0 \leq P_n(A) \leq 1$ ,  $0 \leq Q_n(A) \leq 1$  であるから、

$$0 \leq \mu_n(A) = \frac{P_n(A) + Q_n(A)}{2} \leq 1. \quad (6)$$

また、

$$\mu_n(\Omega_n) = \frac{P_n(\Omega_n) + Q_n(\Omega_n)}{2} = \frac{1 + 1}{2} = 1. \quad (7)$$

さらに、 $A_k \in \mathcal{A}_n$  ( $k = 1, 2, \dots$ ),  $A_k \cap A_m = \emptyset$  ( $k \neq m$ ) のとき、

$$\begin{aligned} \mu_n \left( \bigcup_{k=1}^{\infty} A_k \right) &= \frac{1}{2} \left\{ P_n \left( \bigcup_{k=1}^{\infty} A_k \right) + Q_n \left( \bigcup_{k=1}^{\infty} A_k \right) \right\} \\ &= \frac{1}{2} \left\{ \sum_{k=1}^{\infty} P_n(A_k) + \sum_{k=1}^{\infty} Q_n(A_k) \right\} \\ &= \mu_n \left( \sum_{k=1}^{\infty} A_k \right). \end{aligned} \quad (8)$$

式 (6), (7), (8) より、 $\mu_n$  は  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n)$  上の確率測度である。

さらに、

$$P_n \ll \mu_n, \quad Q_n \ll \mu_n \quad (9)$$

が成り立つ。

式 (9) の証明

$\mu_n(A) = 0$  なる任意の  $A \in \mathcal{A}_n$  に対し、 $P_n(A) + Q_n(A) = 0$ ,  $P_n(A) \geq 0$ ,  $Q_n(A) \geq 0$  であるから  $P_n(A) = Q_n(A) = 0$ 。

ラドン・ニコディムの定理 (Theorem 3.6) より、 $\mu_n$  に関する  $P_n, Q_n$  の密度 (ラドン・ニコディム微分)  $\frac{dP_n}{d\mu_n}, \frac{dQ_n}{d\mu_n}$  が一意に存在するから、密度をそれぞれ  $p_n, q_n$  とおく。このとき、

$$\begin{aligned} P_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\} \right) &= \int_{\left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\}} p_n d\mu_n \\ &= \int_{\left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\}} \frac{p_n}{q_n} q_n d\mu_n \\ &= \int_{\left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\}} \frac{p_n}{q_n} dQ_n \quad (\because (2), (9)) \\ &\leq \int \varepsilon_n dQ_n \\ &\rightarrow 0. \end{aligned}$$

仮定より  $Q_n \triangleleft P_n$  だから、

$$Q_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\} \right) \rightarrow 0.$$

よって、 $Q_n(\{q_n = 0\}) = 0$  より、

$$\begin{aligned} Q_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \right) &= Q_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\} \right) + Q_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n = 0\} \right) \\ &= Q_n \left( \left\{ \frac{dP_n}{dQ_n} \leq \varepsilon_n \right\} \cap \{q_n > 0\} \right) \\ &\rightarrow 0. \end{aligned} \tag{10}$$

式 (5), (10) より、

$$\begin{aligned} Q(U = 0) &\leq \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n \left( \frac{dP_n}{dQ_n} < \varepsilon_n \right) = 0. \\ \therefore Q(U > 0) &= 1. \end{aligned}$$

## 2.4 (iii) $\Rightarrow$ (i) の証明

$\frac{dQ_n}{dP_n} \xrightarrow{P_n} V$  が成り立つような部分列  $\{n\}$  を任意にとる。 $P_n(A_n) \rightarrow 0$  が成り立つような任意の可測集合列  $A_n$  をとる。このとき、

$$\mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \xrightarrow{P_n} 1. \tag{11}$$

式 (11) の証明

$\varepsilon > 0$  を任意にとり固定する。

$$\mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n}(\omega) = \begin{cases} 1 & (\omega \in \Omega_n \setminus A_n) \\ 0 & (\omega \in A_n) \end{cases}$$

であるから、

$$\{\omega \in \Omega_n : d(\mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n}, 1) > \varepsilon\} = \begin{cases} A_n & (0 < \varepsilon < 1) \\ \emptyset & (\varepsilon \geq 1) \end{cases}.$$

よって、

$$P_n(\{\omega \in \Omega_n : d(\mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n}, 1) > \varepsilon\}) \leq P_n(A_n) \rightarrow 0.$$

$\frac{dQ_n}{dP_n} \xrightarrow{P_n} V$ ,  $\mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \xrightarrow{P_n} 1$  より、Theorem 3.3 (v) を適用して、

$$\left( \frac{dQ_n}{dP_n}, \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \right) \xrightarrow{P_n} (V, 1).$$

関数  $h: (v, t) \mapsto vt$  は  $[0, \infty) \times \{0, 1\}$  上非負値連続関数であるから、portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (v)) より、

$$\liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n(\Omega_n \setminus A_n) \geq \liminf_{n \rightarrow \infty} \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \frac{dQ_n}{dP_n} dP_n \geq \mathbb{E}_P[1 \cdot V]. \tag{12}$$

式 (12) の証明

不等式 (1) :  $\int f_n dQ_n \geq \int f_n \frac{dQ_n}{dP_n} dQ_n$  より、 $f_n = \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n}$  とすると、

$$\begin{aligned} \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} dQ_n &\geq \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \frac{dQ_n}{dP_n} dP_n \\ \therefore Q_n(\Omega_n \setminus A_n) &\geq \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \frac{dQ_n}{dP_n} dP_n. \end{aligned}$$

両辺の下極限をとって、

$$\liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n(\Omega_n \setminus A_n) \geq \liminf_{n \rightarrow \infty} \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \frac{dQ_n}{dP_n} dP_n.$$

上で定義した関数  $h$  を用いると、右辺は

$$\liminf_{n \rightarrow \infty} \int \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \frac{dQ_n}{dP_n} dP_n = \liminf_{n \rightarrow \infty} h \left( \frac{dQ_n}{dP_n}, \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \right)$$

と変形できる。 $h$  は非負値連続関数であるから、portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (v)) より

$$\liminf_{n \rightarrow \infty} h \left( \frac{dQ_n}{dP_n}, \mathbb{1}_{\Omega_n \setminus A_n} \right) \geq \mathbb{E}_P[h(V, 1)] = \mathbb{E}_P[V].$$

仮定より、 $\mathbb{E}_P[V] = 1$  であるから、

$$\begin{aligned} \liminf_{n \rightarrow \infty} Q_n(\Omega_n \setminus A_n) &\geq 1 \\ \therefore \lim_{n \rightarrow \infty} Q_n(\Omega_n \setminus A_n) &= 1 \\ \therefore \lim_{n \rightarrow \infty} Q_n(A_n) &= 0. \end{aligned}$$

これより、任意の収束部分列  $\{n\}$  に関して  $Q_n(A_n)$  が 0 に収束するから、もとの列も同じ収束値に収束する。よって、 $Q_n(A_n) \rightarrow 0$  が成り立つ。 $A_n$  は任意の可測集合列であったから、以上より  $Q_n \triangleleft P_n$  が成り立つ。

## 2.5 (ii) $\Rightarrow$ (iii) の証明

上記の証明で述べたように、確率測度  $\mu_n = \frac{P_n + Q_n}{2}$  に関する  $P_n, Q_n$  の密度  $p_n, q_n$  に対し、

$$\frac{d}{d\mu_n} (P_n + Q_n) = 2.$$

なぜなら、任意の可測集合  $A_n$  に対し、

$$\int_{A_n} 2 d\mu_n = 2 \int \mathbb{1}_{A_n} d\mu_n = 2\mu_n(A_n) = P_n(A_n) + Q_n(A_n)$$

が成り立つことから従う。さらに、 $P_n \ll \mu_n, Q_n \ll \mu_n$  より、

$$\begin{aligned} \frac{d}{d\mu_n} (P_n + Q_n) &= \frac{dP_n}{d\mu_n} + \frac{dQ_n}{d\mu_n} = 2. \\ \therefore p_n + q_n &= 2. \end{aligned}$$

密度は非負だから、各  $n$  に対し、

$$0 \leq p_n, q_n \leq 2.$$

ここで、 $\{n'\}$  を  $\frac{dQ_n}{dP_n} \overset{P_{n'}}{\rightsquigarrow} V$  であるような部分列とする。 $\frac{dQ_n}{dP_n}$  は  $Q_n$  に関して一様緊密であることは既に表示している\*5から、プロホロフの定理 (Theorem 3.2 (ii)) より、ある部分列  $\{n''\} \subset \{n'\}$  とある確率空間  $(\Omega, \mathcal{A}, P)$  上の確率変数  $U$  が存在して、 $\frac{dP_{n''}}{dQ_{n''}} \overset{P_{n''}}{\rightsquigarrow} U$  とできる。さらに、任意の  $K \geq 0$  に対し、マルコフの不等式より、

$$\mu_{n''} \left( \frac{dP_{n''}}{d\mu_{n''}} > K \right) \leq \frac{1}{K} \mathbb{E}_{\mu_{n''}} \left[ \frac{dP_{n''}}{d\mu_{n''}} \right] \leq \frac{2}{K}.$$

よって、 $\frac{dP_{n''}}{d\mu_{n''}}$  は  $\mu_{n''}$  に関して一様緊密だから、プロホロフの定理 (Theorem 3.2 (ii)) より、ある部分列  $\{n'''\} \subset \{n''\}$  とある確率空間  $(\Omega'', \mathcal{A}'', \mu)$  上の確率変数  $W$  が存在して、 $\frac{dP_{n'''}}{d\mu_{n'''}} \overset{\mu_{n'''}}{\rightsquigarrow} W$  とできる。以上の議論より、部分列  $\{n'''\}$  上で考えることにより、

$$\frac{dQ_{n'''}}{dP_{n'''}} \overset{P_{n'''}}{\rightsquigarrow} V, \frac{dP_{n'''}}{dQ_{n'''}} \overset{Q_{n'''}}{\rightsquigarrow} U, \frac{dP_{n'''}}{d\mu_{n'''}} \overset{\mu_{n'''}}{\rightsquigarrow} W$$

とできる。表記を簡潔にするために、これ以降、部分列  $\{n'''\}$  を単に  $\{n\}$  と表記する。 $P_n \ll \mu_n$  より、 $\frac{dP_n}{d\mu_n}$  の期待値は、

$$\mathbb{E}_{\mu_n} \left[ \frac{dP_n}{d\mu_n} \right] = \int \frac{dP_n}{d\mu_n} d\mu_n = \int dP_n = 1.$$

\*5 文献 [VdV00] p.88 上部参照。

$\frac{dP_n}{d\mu_n} \xrightarrow{\mu_n} W$ ,  $\mathbb{E}_{\mu_n} \left[ \frac{dP_n}{d\mu_n} \right] = 1$  より、portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (ii)) より

$$\mathbb{E}_\mu[W] = 1. \quad (13)$$

ここで、有界連続関数  $f$  が与えられたとき、関数  $g: [0, 2] \rightarrow \mathbb{R}$  を

$$g(w) = \begin{cases} f\left(\frac{w}{2-w}\right)(2-w) & (0 \leq w < 2) \\ 0 & (w = 2) \end{cases}$$

と定義すると、 $g$  も有界連続関数になる。

$g$  が有界連続関数であることの証明

$f$  の有界性より  $g$  も有界である。 $0 \leq w < 2$  であるような点  $w$  上で  $g$  が連続であることも明らかなので、 $w = 2$  における片側連続性

$$\lim_{w \rightarrow 2-0} g(w) = g(2)$$

が成り立つことを示せば良い。まず、 $f$  は有界だから、ある定数  $M \geq 0$  が存在して、任意の  $w \in \mathbb{R}$  に対して

$$|f(w)| \leq M$$

が成り立つ。ここで、 $\varepsilon > 0$  を任意にとる。<sup>\*6</sup> $2 - \varepsilon/M < w < 2$  なる  $w$  上を考えると、 $0 < 2 - w < \varepsilon/M$  であるから、

$$|g(w)| = \left| f\left(\frac{w}{2-w}\right)(2-w) \right| < M \cdot \frac{\varepsilon}{M} = \varepsilon.$$

また、

$$\begin{aligned} \frac{dP_n}{dQ_n} &= \frac{p_n}{q_n} = \frac{p_n}{2-p_n} = \frac{W_n}{2-W_n}, \\ \frac{dQ_n}{d\mu_n} &= q_n = 2-p_n = 2-W_n \end{aligned}$$

が成り立つことから、

$$\mathbb{E}_{Q_n} \left[ f\left(\frac{dP_n}{dQ_n}\right) \right] = \int f\left(\frac{dP_n}{dQ_n}\right) dQ_n \quad (14)$$

$$= \int f\left(\frac{dP_n}{dQ_n}\right) \frac{dQ_n}{d\mu_n} d\mu_n \quad (\because Q_n \ll \mu_n)$$

$$= \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f\left(\frac{dP_n}{dQ_n}\right) \frac{dQ_n}{d\mu_n} \right]$$

$$= \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f\left(\frac{W_n}{2-W_n}\right)(2-W_n) \right] \quad (15)$$

$$= \mathbb{E}_{\mu_n} [g(W_n)]. \quad (16)$$

(15) から (16) への変形は、 $W_n = 2$  (すなわち  $\frac{dQ_n}{d\mu_n} = 0$ ) のとき  $g(W_n) = 0$  であることからわかる。

$W_n \xrightarrow{\mu_n} W$  と portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (ii)) より

$$\mathbb{E}_{\mu_n} [g(W_n)] \rightarrow \mathbb{E}_\mu [g(W)] = \mathbb{E}_\mu \left[ f\left(\frac{W}{2-W}\right)(2-W) \right]. \quad (17)$$

式 (16) と式 (17) より、

$$\mathbb{E}_{Q_n} \left[ f\left(\frac{dP_n}{dQ_n}\right) \right] \rightarrow \mathbb{E}_\mu [g(W)] = \mathbb{E}_\mu \left[ f\left(\frac{W}{2-W}\right)(2-W) \right]. \quad (18)$$

---

<sup>\*6</sup>  $\varepsilon$  をとる前に  $M$  をとっていることがポイント。



また、 $\frac{dP_n}{dQ_n} \overset{Q_n}{\rightsquigarrow} U$  と portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (ii)) より、

$$\mathbb{E}_{Q_n} \left[ f \left( \frac{dP_n}{dQ_n} \right) \right] \rightarrow \mathbb{E}_Q[f(U)]. \quad (19)$$

式 (17) と式 (19) より、任意の有界連続関数  $f$  について

$$\mathbb{E}_Q[f(U)] = \mathbb{E}_\mu \left[ f \left( \frac{W}{2-W} \right) (2-W) \right] (= \mathbb{E}_\mu[g(W)]).$$

ここで、 $f_m \leq 1$  かつ  $f_m \downarrow \mathbb{1}_{\{0\}}$  であるような関数列  $\{f_m\}$  をとる。たとえば、

$$f_m(x) = \begin{cases} 0 & (|x| \geq \frac{1}{m}) \\ -mx + 1 & (0 \leq x \leq \frac{1}{m}) \\ mx + 1 & (-\frac{1}{m} \leq x \leq 0) \end{cases}$$

とすればよく、このとき  $f_m$  は有界連続関数である。これよりルベーグの収束定理を適用でき、

$$\begin{aligned} Q(U=0) &= \mathbb{E}_Q[\mathbb{1}_{\{0\}}(U)] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \mathbb{E}_Q[f_m(U)] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{E}_{Q_n} \left[ f_m \left( \frac{dP_n}{dQ_n} \right) \right] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f_m \left( \frac{W_n}{2-W_n} \right) (2-W_n) \right] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \mathbb{E}_\mu \left[ f_m \left( \frac{W}{2-W} \right) (2-W) \right] \\ &= \mathbb{E}_\mu \left[ \mathbb{1}_{\{0\}} \left( \frac{W}{2-W} \right) (2-W) \right] \\ &= 2\mu(W=0). \end{aligned}$$

同様に、任意の有界連続関数  $f$  に対し、関数  $h: [0, 2] \rightarrow \mathbb{R}$  を

$$h(w) = \begin{cases} f \left( \frac{2-w}{w} \right) w & (0 < w \leq 2) \\ 0 & (w = 0) \end{cases}.$$

と定義すると、 $h$  も有界連続関数になる。

$h$  が有界連続関数であることの証明

$f$  の有界性より  $h$  も有界である。 $0 < w \leq 2$  であるような点  $w$  上で  $h$  が連続であることも明らかなので、 $w = 0$  上における片側連続性

$$\lim_{w \rightarrow +0} h(w) = g(0)$$

が成り立つことを示せば良い。まず、 $f$  は有界だから、ある定数  $M \geq 0$  が存在して、任意の  $w \in \mathbb{R}$  に対して

$$|f(w)| \leq M$$

が成り立つ。ここで、 $\varepsilon > 0$  を任意にとる。 $0 < w < \varepsilon/M$  なる  $w$  上を考えると、

$$|h(w)| = \left| f \left( \frac{2-w}{w} \right) w \right| < M \cdot \frac{\varepsilon}{M} = \varepsilon.$$

ここで、

$$\begin{aligned} \mathbb{E}_{P_n} \left[ f \left( \frac{dQ_n}{dP_n} \right) \right] &= \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f \left( \frac{dQ_n}{dP_n} \right) \frac{dP_n}{d\mu_n} \right] \\ &= \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f \left( \frac{2-W_n}{W_n} \right) W_n \right] \\ &= \mathbb{E}_{\mu_n} [h(W_n)]. \end{aligned}$$

$h$  は有界連続関数だから、portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (ii)) より、

$$\mathbb{E}_{\mu_n}[h(W_n)] \rightarrow \mathbb{E}_\mu[h(W)].$$

よって、

$$\mathbb{E}_{P_n} \left[ f \left( \frac{dQ_n}{dP_n} \right) \right] \rightarrow \mathbb{E}_\mu[h(W)] = \mathbb{E}_\mu \left[ f \left( \frac{2-W}{W} \right) W \right].$$

一方、 $\frac{dQ_n}{dP_n} \xrightarrow{P_n} V$  と portmanteau の補題 (Lemma 3.1 (ii)) より

$$\mathbb{E}_{P_n} \left[ f \left( \frac{dQ_n}{dP_n} \right) \right] \rightarrow \mathbb{E}_P[f(V)].$$

これより、

$$\mathbb{E}_P[f(V)] = \mathbb{E}_\mu \left[ f \left( \frac{2-W}{W} \right) W \right]$$

が成り立つ。ここで、 $0 \leq f_m(x) \uparrow x (= f(x))$  なる関数列を用いる。例えば、

$$f_m(x) = \begin{cases} x & (0 \leq x \leq m) \\ m & (x > m) \end{cases}$$

を考えればよい。このとき、

$$\begin{aligned} \mathbb{E}_P[V] &= \mathbb{E}_P[f(V)] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \mathbb{E}_P[f_m(V)] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{E}_{P_n} \left[ f_m \left( \frac{dQ_n}{dP_n} \right) \right] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \lim_{n \rightarrow \infty} \mathbb{E}_{\mu_n} \left[ f_m \left( \frac{2-W_n}{W_n} \right) W_n \right] \\ &= \lim_{m \rightarrow \infty} \mathbb{E}_\mu \left[ f_m \left( \frac{2-W}{W} \right) W \right] \\ &= \mathbb{E}_\mu \left[ \left( \frac{2-W}{W} \right) W \right] \\ &= \mathbb{E}_\mu [\mathbb{1}_{W>0}(2-W)] \\ &= 2\mu(W > 0) - \mathbb{E}_\mu[W] \quad (\because \mathbb{1}_{W>0}W = W) \\ &= 2\mu(W > 0) - 1. \end{aligned}$$

最後の式変形は式 (13) を用いた。以上より、

$$\begin{cases} Q(U=0) = 2\mu(W=0) \\ \mathbb{E}_P[V] = 2\mu(W>0) - 1 \end{cases}$$

が成り立つことから、

$$\begin{aligned} \mathbb{E}_P[V] &= 2(1 - \mu(W=0)) - 1 \\ &= 1 - 2\mu(W=0) \\ &= 1 - Q(U=0) \\ &= Q(U>0) \\ &= 1. \end{aligned}$$

したがって、部分列  $\{n'''\}$  上で  $\mathbb{E}_P[V] = 1$  であるから、(iii) が成り立つ。

### 3 補足

#### 3.1 収束する確率変数列の性質

**Lemma 3.1** (Portmanteau の補題 [VdV00, 2.2 Lemma (p.6)], [BL21, Proposition (p.9)], [Bil95, Theorem 29.1 (p.378), Problem 29.1 (p.385)]).  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n, P_n)$  ( $n = 1, 2, \dots$ ),  $(\Omega, \mathcal{A}, P)$  を確率空間とし、 $X_n: \Omega_n \rightarrow \mathbb{R}^k$ ,  $X: \Omega \rightarrow \mathbb{R}^k$  を  $(\Omega_n, \mathcal{A}_n, P_n)$ ,  $(\Omega, \mathcal{A}, P)$  上の確率変数とする。次の主張は同値である：

- (i) 関数  $x \mapsto P(X \leq x)$  の任意の連続点  $x$  に対して  $P_n(X_n \leq x) \leq P(X \leq x)$ .
- (ii) 任意の有界連続関数  $f$  に対して  $\mathbb{E}_{P_n}[f(X_n)] \rightarrow \mathbb{E}_P[f(X)]$ .
- (iii) 任意の有界リプシッツ関数  $f$  に対して  $\mathbb{E}_{P_n}[f(X_n)] \rightarrow \mathbb{E}_P[f(X)]$ .
- (iv) 任意の非負連続関数  $f$  に対して  $\liminf_{n \rightarrow \infty} \mathbb{E}_{P_n}[f(X_n)] \geq \mathbb{E}_P[f(X)]$ .
- (v) 任意の開集合  $G$  に対して  $\liminf_{n \rightarrow \infty} P_n(X_n \in G) \geq P(X \in G)$ .
- (vi) 任意の閉集合  $F$  に対して  $\limsup_{n \rightarrow \infty} P_n(X_n \in F) \leq P(X \in F)$ .
- (vii)  $P(X \in \partial B) = 0$  なる任意のボレル集合  $B$  に対して  $P_n(X_n \in B) \rightarrow P(X \in B)$ .

**Theorem 3.2** (プロホロフの定理 [VdV00, 2.4 Theorem (p.8)]).  $X_n$  を  $\mathbb{R}^k$  上に値をとる確率変数とする。

- (i)  $X_n \rightsquigarrow X$  ならば、 $\{X_n : n \in \mathbb{N}\}$  は一様緊密である。
- (ii)  $X_n$  が一様緊密であるならば、ある部分列  $\{n_j\}$  が存在して、ある確率変数  $X$  に対して  $X_{n_j} \rightsquigarrow X$ .

**Theorem 3.3** ([VdV00, 2.7 Theorem (p.10)]).  $X_n, X$  を確率変数とする。このとき、

- (iii) ある定数  $c$  に対して  $X_n \xrightarrow{P_n} c$  が成り立つことは  $X_n \xrightarrow{P_n} X$  が成り立つことと同値である。
- (v) ある定数  $c$  に対して  $X_n \xrightarrow{P_n} X$  かつ  $Y_n \xrightarrow{P_n} Y$  ならば、 $(X_n, Y_n) \rightsquigarrow (X, c)$ .

**Lemma 3.4.** 非負値確率変数列  $X_n$  がある確率変数  $X$  に分布収束するとき、 $X$  もまた非負値確率変数である。

*Proof.*  $U = (-\infty, 0)$  とおくと、 $U$  は開集合である。 $X_n$  が  $X$  に分布収束することから、Portmanteau の補題より

$$\begin{aligned} \liminf_{n \rightarrow \infty} P(X_n \in U) &\geq P(X \in U). \\ \liminf_{n \rightarrow \infty} P(X_n < 0) &\geq P(X < 0). \end{aligned}$$

ここで、各  $n$  に対し  $X_n$  は非負値をとる確率変数であるから  $P(X_n < 0) = 0$ . よって、

$$\begin{aligned} 0 &\geq P(X < 0). \\ \therefore P(X < 0) &= 0. \end{aligned}$$

よって、 $X$  の非負値確率変数である。 □

### 3.2 上極限・下極限の性質

**Lemma 3.5** ([BL21, Lemma 1 (p.7)]).  $a$  を実数とし、以下を満たす関数列  $\{g_n\}$  を考える：

$$\text{任意の } \varepsilon > 0 \text{ に対し } \liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon) \geq a.$$

このとき、ある  $\{\varepsilon_n\}$  が存在して、 $\varepsilon_n \downarrow 0$  かつ  $\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon_n) \geq a$  を満たす。

*Proof.* 各整数  $k \geq 1$  に対し  $\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n\left(\frac{1}{k}\right) \geq a$  が成り立つことから、ある自然数  $n_k$  が存在して、 $n > n_k$  を満たす任意の  $n$  について  $g_n\left(\frac{1}{k}\right) > a - \frac{1}{k}$  が成り立つ。一般性を失うことなく  $n_{k+1} > n_k$  ( $k = 1, 2, \dots$ ) となるように  $\{n_k\}$  をとれる。ここで、各  $k$  に対し、 $n_k \leq n < n_{k+1}$  なる  $n$  について、 $\varepsilon_n = \frac{1}{k}$  とする。すると、 $n \geq n_1$  を満たす全ての  $n$  で  $g_n(\varepsilon_n) > a - \varepsilon_n$  が成り立つ。このように定義した数列  $\{\varepsilon_n\}$  は明らかに  $\varepsilon_n \downarrow 0$  を満たし、

$$\liminf_{n \rightarrow \infty} g_n(\varepsilon_n) \geq a.$$

□

### 3.3 ラドン・ニコディムの定理

Le Cam の第一補題を示す際に用いるラドン・ニコディムの定理を紹介する。

**Theorem 3.6** (ラドン・ニコディムの定理 [佐藤 94, 定理 7.1 (p.84)]).  $P, Q$  を可測空間  $(\Omega, \mathcal{A})$  の確率測度とし、 $Q \ll P$  とする。このとき、確率空間  $(\Omega, \mathcal{A}, P)$  上の非負可積分な確率変数  $Y$  で、

$$Q(A) = \int_A Y \, dP \quad (= \mathbb{E}_P[Y \mathbf{1}_A]), \quad A \in \mathcal{A} \quad (20)$$

となるものが存在し、次の意味で一意的：式 (20) を満たす別の  $Y'$  があるとする、 $Y = Y'$  が  $P$ -a.e. で成り立つ。この  $Y$  をラドン・ニコディム微分といい、 $\frac{dQ}{dP}$  と書く。

## 参考文献

- [20221] 統計学への確率論, その先へ: ゼロからの測度論的理解と漸近理論への架け橋. 内田老鶴圃, 2021.
- [Bil95] Patrick Billingsley. Measure and probability. 1995.
- [BL21] G Jogesh Babu and Bing Li. A revisit to le cam' s first lemma. *Sankhya A*, Vol. 83, No. 2, pp. 597–606, 2021.
- [VdV00] Aad W Van der Vaart. *Asymptotic statistics*, Vol. 3. Cambridge university press, 2000.
- [佐藤 94] 佐藤坦. はじめての確率論 測度から確率へ. 共立出版, 1994.
- [舟木 04] 舟木直久. 確率論. 講座数学の考え方 / 飯高茂 [ほか] 編. 朝倉書店, 2004.
- [杉浦] 杉浦光夫. 基礎数学 2 解析入門 1, 第 2 巻. 東京大学出版会.